『世界の日本語教育』7，1997年6月

日本語母語話者の会話における「情報伝達行動の持続」

李　麗　燕*

キーワード：**情報伝達行動の持続，接続表示，注目要求，時間稼ぎ，他者無視**

要　旨

会話に参加するにあたって，「話の展開に関する主導権」を独占して，言いたいことを最後まで順調に言い続けるのは簡単なことではない．他の会話参加者に「話の展開に関する主導権」を奪われることによって，自分の行ってきた情報伝達行動が途中であるにもかかわらず，やむをえず中断することがあるからである．その中断が現れないように，つまり，「話の展開に関する主導権」を他の会話参加者に奪われないように，話し手は何らかの技術を使わなければならなくなる．

本稿では，「情報伝達行動の持続」に焦点を当て，日本語母語話者の話し手が，情報伝達行動の中断を防ぐために，つまり，「話の展開に関する主導権」を持ち続けるために使う技術を「接続表示」，「注目要求」，「時間稼ぎ」，「他者無視」の4種類に分けて詳述した．また，この4種類の技術を学習項目として会話教育の現場に導入する必要性も示唆した．

1. はじめに

会話においては，一人の会話参加者が「話の展開に関する主導権」を独占して，ある事柄についてのまとまった情報を伝えることが観察される．このような情報伝達行動を成し遂げるためには，何らかの技術を使わなければならない．その技術は，情報伝達行動の冒頭，途中，末尾に現れる．冒頭では，情報伝達行動を始めるために，「話の展開に関する主導権」を取る技術が必要とされる(メイナード　1993; Edelsky　1981; Jefferson　1978; Maynard　1989; Polanyi　1985; Sacks　1972)．途中では，その取った「話の展開に関する主導権」を持ち続ける技術も無視するわけにはいかない．また，末尾では，「話の展開に関する主導権」を終える(あるいは渡す)技術も知っておくべきであろう．「話の展開に関する主導権」を他の会話参加者に奪われることによって，自分の行ってきた情報伝達行動が途中であるにもかかわらず，やむをえず中断することがある．その中断された情報伝達行動を再開するために，何らかの技術が使われる(李　1997)．一

* LEE, Li-Yen:　名古屋大学大学院文学研究科日本言語文化専攻(博士課程後期課程)．

方，その中断が現れないように，つまり，「話の展開に関する主導権」を他の会話参加者に奪われないように，話し手が何らかの技術を使うことも考えられる．本稿では，「情報伝達行動の持続」に焦点を当て，話し手が，情報伝達行動の中断を防ぐために，つまり，「話の展開に関する主導権」を持ち続けるために使う技術について考察する．これは，日本語母語話者の会話における「情報伝達行動の持続」の実態を明らかにしようとする実証的な研究であると同時に，それに際して使われる技術を学習項目として日本語教育の現場に導入する必要性をも示唆するものである．

2. 研究方法

考察に用いる資料を実際に行われた日常会話から採ることにした．これは筆者が日本人(日本語母語話者)の友人に頼んで録音してもらったものである．「親しい友人と雑談するチャンスがあれば，その会話を録音してください」というのが依頼の内容である．全部で五つの雑談があり，いずれも親しい友人同士2名によって行われたものである．録音は，1994年4月から6月の間に行われた．会話資料の詳細は次の通りである．

会話資料	会話参加者	性別	年齢	時間	会話の行われた場所
資料 1	話者 A 話者 C	女 女	30代 20代	約31分	大学院生の研究室
資料 2	話者 B 話者 F	女 女	20代 20代	約43分	大学院生の研究室
資料 3	話者 G 話者 H	女 女	20代 30代	約45分	公園
資料 4	話者 I 話者 J	女 女	20代 20代	約45分	話者 I の自宅
資料 5	話者 K 話者 L	女 女	20代 20代	約35分	話者 K の自宅

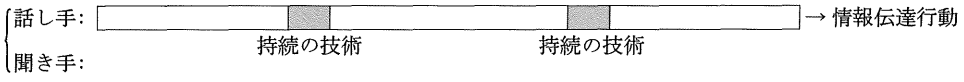
上の表にみられるように，会話参加者は合計5組で，10名である．録音テープは筆者が文字化し，それを日本語母語話者に確認してもらった上で，分析のための資料とした．以下は本稿における会話例の表記方法である．

〈時間の経過と共に横に進み，2名の発話の重なり部分がみえるように表記する〉

↑	上昇音調	( )	非言語行動
↓	下降音調	×	聞き取れない箇所(1拍を表す)
→	平板音調	^	沈黙の間(1秒を表す)
↓↑	下降音調＋上昇音調	○○，◇◇	人名

3. 情報伝達行動の「持続」にあたってみられる技術

他の会話参加者の行動による中断を防ぐために，話し手はある事柄についてのまとまった情報を伝えながら，同時に何らかの技術も使っていると考えられる．この技術は，「話の展開に関する主導権」を持ち続けるためのものである．「話の展開に関する主導権」を失いそうな場合に現れることもあるし，そうではない場合に現れることもある．次の図にみられるように，情報伝達行動の途中に観察される．



情報伝達行動の「持続」にあたって，日本語母語話者が「話の展開に関する主導権」を持ち続けるために使う技術を「接続表示」，「注目要求」，「時間稼ぎ」，「他者無視」の4種類に分けて，次の**3–1.**～**3–4.**で詳述する．

3–1. 接続表示(技術1)

「接続表示」は意味を論理的に繋げていくために使われるものである．「接続表示」が現れた時点では，聞き手は，「話し手には情報伝達行動を続けていく意欲がある」，と認定しやすいので，「話の展開に関する主導権」を取らずに，話し手の話を聞き続けることが多い．したがって，話し手にとっては，「接続表示」は「話の展開に関する主導権」を持ち続けるために使える技術の1種である．例えば，次の(例1)における「それでねー↑」，「そしたらー」，「でー」，(例2)における「だから」，「そうすとさー」，「でも」がその例である．

(例1) 資料5より

01K	なんかねー↓	これ	わたしがー	ふざけてね↑	なんか	(笑う)	向こうがね	(笑う)	手紙			
02L								(笑う)				
03K	にねー↑	あのー	あれっ	^	あの	かいっ	あのー	新しい曲が色々できたんだ	とか言っ			
04L	うん↓								(笑う)			
05K	てるからー	うん↓	それでねー↑	笑わないでよー	(笑う)	それでねー↑	(笑う)	新しい				
06L		(笑う)	(笑う)		(笑う)							
07K	曲ができたんだ	って書いてたから	うん↓	あたし	あー	それは	一度	聞いてみたいわ	って			
08L			うん↓									
09K	いうふうにー	ちょっと	挨拶みたいに書いたのよー	そしたらー	あの	すぐ	カセットを送った					
10L		うん↓		うん↓								

11K からね　とかって　返事が来て　　えー↑　とか思ってー　　で一　その手紙はすぐ来たんだけ
12L　　ふーん　　うん↓　　うん↓

(例 2)　資料 5 より

01K 音楽やってる人にとってさー　それねー↓　んっ　美術なんかでもそうだと思うけど　美術館なんか
02L　　うん↓

03K 展覧会とかも　高いじゃないー↓　だから　千円とか取るとこあるでしょう↑　　あーーーーん
04L　うーん↓　　本当ね↓　　うん↓　あるねー↑

05K　(笑う)　そうすとさー　そう　やっぱり　美術やってる人とか　音楽やってる人とかっ　何回も
06L そういうとこ

07K 見たり聞いたりしたいっ　したわけじゃない↑　　でも　それ　お金の問題でさー　行けなくな
08L　　そういうっ　　そうなん

09K っちゃうでしょう↓　それってね　悲しいなー　とは思うよ　　うーん↓
10L です　　悲しいっなー　と思う　　だって　いくら働

上の(例 2)では，話し手である話者 K の「…見たり聞いたりしたいっ，したわけじゃない↑」(07 行目) という発話に対して，それまで聞き手であった話者 L は「話者 K の話はもう終わった」と判断して，「そういうっ」(08 行目) という発話によって，「話の展開に関する主導権」を取ろうとしているのではないかと思われる．しかし，元の話し手である話者 K は「でも」(07 行目) という「接続表示」を使って，情報伝達行動を続けている．この「でも」は意味を論理的に繋げていくために使われるものであるが，同時に，「話の展開に関する主導権」を持ち続けようとする話者 K の意欲もこの「でも」の使用によって観察できるであろう．

一方，次の(例 3)における「なに話したかというとー」，(例 4)における「何が目的だったかっていうと」，(例 5)における「なんでかっていうとー」はその次にくる話がどんな話かについての表示であるため，「メタ言語」に属する．このような表現は情報伝達行動が終わっていないこと，ひいては，「話の展開に関する主導権」を持ち続けようという話し手の意志をも表している．したがって，このような接続を表すメタ言語的な表現もまた「話の展開に関する主導権」を持ち続けるための技術としての性格が強いと考えていいだろう．

(例 3)　資料 2 より

01B ふーーーん　　そう↑　　あんまり　話さなかった↑　その時
02F　うん↓　○○先生は　本当に　一言だけ　　うん↓　　うんうん

03B　　うん↓
04F うん　^ ^ ^　でも　一番　分かりやすかったけど　(笑う)　なに　話したか　というとー　フラ

05B　　うん↓
06F ンス人ーが　どうしてー　日本人から見ると　　なんていうの↑　こ　個性が強いとか　そういう

07 B　　うんうん　うんうん　う
08 F　ふうに　思われるか　という話でー　それはー　あのー　教育ーーに　^　あのー　理由があって

(例 4)　資料 3 より

01 G　^ ^　あの　なんかー　んー→　この間ー　初めてー　あの　職場の人と　食事をしに行って
02 H　うん↓　中華街↑　う

03 G　中華街じゃなかったんですよー　で　何が目的だったか　っていうと　今度　パーティーを
04 H　ん↓　中華街じゃなかったの↑　えーー　うん↓

05 G　やるんですね↑　あのー　^　何だろう　6 月ー10 日に　コースが終わるんですよ
06 H　うんうん　あー　その　修了

07 G　うーん↓　で　その下見　っていうのが　メインの目的でー　で　まあ　他に
08 H　パーティーみたいな↑　うん↓　(咳)　うんうんうんうん

(例 5)　資料 2 より

01 B　^ ^ ^ ^　んー→　あー
02 F　今日　なっにもねー↓　予習せずにー　行ってー　○○先生の授業なんだけどー

03 B　あー　あー↓　うん↓
04 F　こっ　講読みたいな授業でー　で　ばーっと　読んで　訳して　っていう授業のね↑

05 B　あー　よ
06 F　全然　やってなくて　当たったら　×××　とか思ってたら　やっ　幸い　当たらなくて　よかった

07 B　かったね↑　よかったね↑　(笑う)　スリル満点よねー↑　(笑う)
08 F　(笑う)　うーーん↓　長いなー　と思って　もう　なんでか　っていうとー

09 B　うん↓
10 F　その　○○先生にー　あのー　論文の　計画書↑　を提出しなくちゃいけなくて　こんっ　今月　末

11 B　そうだね↑
12 F　までに　^　だけど　末　って言っても　後　火曜日まででしょう↑　だから　月　火↑

このように，「接続表示」は，情報伝達行動の「持続」にあたってみられる技術の 1 種であり，接続語句だけではなく，メタ言語によって表されることもある．

3–2.　注目要求(技術 2)

情報伝達行動の「持続」にあたって，「注目要求」という技術も話し手によって使われる．自分の情報伝達行動を他の会話参加者に注目してもらうことによって，他の会話参加者の行動による中断を防ぐことができるからである．これは，自分の情報伝達行動を順調に続けることに繋がる(李　1995)．「ほら」「あのね」「語尾の延長」「同一語句の反復」「上昇音調」などによって表される．

3-2-1.「ほら」の使用

次の(例 6)では，話者 I が友人の結婚式で歌を歌ったことについて述べている．05 行目における話者 I の「ほら」が「注目要求」の例である．

(例 6) 資料 4 より

01 I もう 仲人さんが 挨拶の時に入ってたんだわね↑ あたし だからさー もう 自分が 一体
02 J ふーーーん

03 I いつ 歌っていいか 分かんないじゃんねー↓ まあ そんな まだ 始まったばかりだから まだ
04 J うんうん

05 I まだだと思ったけど で どきどきしててさー そいで 何回も 何回も何回もさー ほら
06 J うんうん うーん↓

07 I お色直しとか で いなくなる間に歌うでしょう↑ そすと 司会の人 じゃー ここで あ
08 J うんうん

09 I のー 自慢の喉を披露してもらいましょう とかって言うんじゃんね (笑う) それで あたしか
10 J (笑う)

11 I なー↑ とかって思ってー どきどきして (笑う) そしたら 親戚のおじちゃんだったとかさー
12 J (笑う) どきどきして

また，次の(例 7)では，話者 B が卒業論文の口頭試問の時のことについて述べている．01 行目における話者 B の「ほら」もその「注目要求」の例である．

(例 7) 資料 2 より

01 B ^ ^ なんか 最初に 聞かれたのがー ほら あたし 移入民ー子女のー 子供が持ってい
02 F うん↓ うーん↓

03 B る 言葉の問題とかさー 取り上げたじゃんねー↓ ^ ^ [どうしたの↑
04 F うーん↓ いや 雨 降ってるか

05 B 傘 持ってる↑ 貸してあげるわ うん↓ ××
06 F なー とか 思ったの↓ 持ってない (笑う) あーー ありがと じゃ 車ま

07 B ××××]で一 ^ その もう 今のー 子供たちって 二世とか 三世になってるでし
08 F で うんうん うん↓

09 B ょう↓ で 二世とか三世になってるにもかかわらずー まだ 親のー なに↑ 母国 に
10 F うん↓ うん↓

但し，このような「注目要求」があるにもかかわらず，他の会話参加者(聞き手)が注目を示さないこともある．この時，自分の情報伝達行動が中断されやすくなる．例えば，上の(例 7)で

は，話し手である話者Bが「ほら」という注目要求を使っても，聞き手である話者Fは注目を長く示していないため，03行目の2秒の沈黙の後，[ ]内の会話が現れている．それによって，元の話(卒業論文の口頭試問の時のことについての話)が一時的に中断されている．

なお，上の(例6)における「ほら，お色直しとか，で，いなくなる間に歌うでしょう↑」，(例7)における「ほら，あたし，移入民ー子女のー，子供が持っている，言葉の問題とかさー，取り上げたじゃんねー↓」は聞き手にあることを気づいてもらったり思い出してもらったりするための発話であるだけではなく，「ほら…」のような発話を前置きとして使うことによって，その次にくる伝達事項を順調に提出するための発話だとも考えられる．

3-2-2. 「あのね」の使用

次の(例8)では，話者Bの情報伝達行動の途中で，話者Fの「あ，本当↓，あ，そういうのを読むといいねー↓，ありがとー」(04, 06行目)という発話が入っている．このような他の会話参加者の割り込んできた発話によって，元の話し手の情報伝達行動が中断されることがある．(例8)では，元の話し手である話者Bは，「あのねー↓」(05行目)を使ってから，情報伝達行動を続けているため，中断が現れていない．この「あのねー↓」は，他の会話参加者の注目を引くために使うものだと考えられる．

(例8) 資料2より

01 B ふーーん ^ 砂漠がテーマなの↑ ×××　あの
02 F うん↓ そう↓ 砂漠にしようかなー とか思って (笑う)

03 B 曾野綾子がさー 砂漠について いっぱい書いてる エッセーの中で
04 F うん↓ ×××× あ 本当↓ あ そういうのを読むといいね

05 B **あのねー↓** 「砂漠ーこの神の土地」っていう エッセーがある と思うよ あの
06 F ー↓ ありがとー ふーーーーん うん↓

07 B 人は そう↓ 砂漠に神を見出すんだって なんにもないところに だから
08 F うーん↓ サン＝テグジュペリとかもそう↓ うーん↓

09 B なにか共通する点 あるかもしれないから 読んでみると いいかもしれない
10 F うーん↓ うーん↓ ありがと そう↓ だから これ

但し，他の会話参加者が話すことをやめ，聞き手になり続けることを引き受けない限り，様々な言語表現によって「注目要求」を行っても，その効果は得られない．この場合，自分の情報伝達行動を続けるのはやはり無理なことであろう．次の(例9)を参照されたい．この例では，話者Aが修士論文のデータを収集するために必要な被験者に学校に来てもらうことの難しさについて述べている．その途中で，聞き手である話者Cの「でも，そう嫌かな，撮られるの ^ 時間が

問題↑」(08 行目) という情報要求が入っている．この聞き手(話者 C)からの情報要求に対して，元の話し手(話者 A)はその求められた情報を提示してから，「あのねー↓，結構ねー↓…」(09 行目) のように，何かを伝え続けようとしている．この「あのねー↓」の使用も「注目要求」という行動の現れだと考えられる．但し，この伝え続けようとする「何か」は聞き手である話者 C の「でもねー↑，うん↓，世の中ねー↓，そんな忙しい人ばっかりじゃないでしょう↓」(10, 12 行目) という発話によって中断されている．

(例 9)　資料 1 より

01 A わたしは　だからー　なんか　これって　わりと　肉体労働っぽいからー　あ　××××××
02 C　　肉体ろう　(笑

03 A　　なんか　おね　お願いします　お願いします　なんかさー　生命保険かなんかの勧誘　やってる
04 C う)　　肉体労働　　うん↓

05 A みたいでさー　押しを強く　とかさー　　あの　向こうが嫌だと言っても　　諦めないとか
06 C　　うん↓　　うーん↓　　でも　でもー

07 A さー　　いやっ　　そう↓　^　そんな感じする　うん↓
08 C　　^　でも　そう嫌かな　撮られるの　^　時間が問題↑　　時間の拘束だけ

09 A そんな感じ　うん↓　あのねー↓　結構ねー↓　うん↓
10 C ね↑　　でもねー↑　　うん↓　世の中ねー↓　そんな忙しい人ばっかりじゃ

11 A　　そうだけどさー　なんかー　^　でもさー　なにー↑　ついでだったらいいけどー
12 C ないでしょう↓　　う

13 A　　わざわざ　これのために　学校に来る　とかってことは　絶対　ならないからー　　だから
14 C ん↓　　あ　それは嫌だろうね↑　うん↓　その

3-2-3. 語尾の延長

次の(例 10)では，話者 I の情報伝達行動の途中で，話者 J の「あ，本当↓，みんな，代わった，で，やな，やっぱり，全然，連絡しとらへん」(04, 06 行目) という発話が入っている．ここでは，元の話し手である話者 I が自分の情報伝達行動を続けるに際して，「代わってーー」(03 行目) のように，語尾を延ばしている．このような「語尾の延長」は，「話の展開に関する主導権」の競合の時に観察される技術の 1 種である．「語尾の延長」は，「他の会話参加者の注目を引く」という働きを持っているため，その使用によって，自分の「話の展開に関する主導権」を持ち続ける意欲も表面化されるのではないかと思われる．

(例 10)　資料 4 より

01 I　　んーとね↓　○○ちゃんはねー↓　^　○○ちゃんも
02 J ○○ちゃんって　今　どこの営業所にいるの↑

03 I 代わったんだよね↑　前　栄だったんだけどーー　代わってーー　^
04 J　あ　本当↓　みんな　代わった　で　やな　やっぱり

05 I ○○ちゃん　かみっ　上前津だったかなー↓　^　うーん↓　なんか　あんまり　はっき
06 J 全然　連絡しとらへん　(笑う)　あ　ほんま

07 I り　覚えてないけど　上前津だったような気がする　^　かみまえっ　あっ　上前津じゃな
08 J　ふーーん

09 I いか　なんか　どこだったかな　あんまり　はっきり　分かんないけど　うん↓　すっ
10 J　ふーーん　^ ^　◇◇ちゃ

3-2-4. 同一語句の反復

次の(例 11)では，話者 B と話者 F の発話が 03, 04 行目のあたりで，重なって現れている．このような「話の展開に関する主導権」の奪い合いに際して，話者 B は「ちゃんと，ちゃんとさー」(03, 05 行目) のように，同一語句を反復してから，自分の未完了の情報伝達行動を続けている．このような「同一語句の反復」も他の会話参加者の注目を引くために使われるものだと考えられる．この話者 B の「注目要求」に対して，話者 F は 06 行目の最初の「うーん↓」によって，自分の注目を表している．

(例 11)　資料 2 より

01 B　もう　東京ーー
02 F ^　なんか　これー　これができたから　すっごい　気分的に　まあ　楽っていう　あー　すごい

03 B　行くのも　気楽じゃん↑　そこが偉いんだって　あたしさー　どっか　行くのにさー　ちゃんと
04 F 終わったー　って感じ　××××　××××　×××××　か

05 B　ちゃんとさー　何でも終わらせて行こう　と思うんだけどー　それ　やった
06 F もしれない　うーん↓　うーん↓

07 B 試しがないもん　偉いね↑ F ちゃん　なんで↑
08 F　うーん↓　昨日の夜も　いや　最近ー　なんか　眠れなくて　全然　眠

上の(例 11)にみられるように，「同一語句の反復」によって，他の会話参加者の注目を求める場合，語句をそのまま反復するだけではなく，「さー」「ねー」もその後につけて使うことが多い．もし，「さー」「ねー」をその後につけない場合は，話し手は，その反復される語句の語尾を延ばして発音するであろう．

3-2-5. 上昇音調の使用

次の(例 12)では，話者 I の情報伝達行動における「そのお年寄りのー↑」(07 行目)「そういう仕事↑」(09 行目) が上昇音調で現れている．伝達情報は話し手である話者 I しか持っていない

ため，この上昇音調の「そのお年寄りのー↑」「そういう仕事↑」は，聞き手である話者Jに情報の正しさを確認するものでもないし，同調を求めるものとも思えない．話し手である話者Iは，上昇音調の使用によって，聞き手(話者J)の注目を求めていると考えていいだろう．

(例12)　資料4より

01 I　　んーとね↓　こな　その時　聞いた時は　まだ　同じー　その
02 J　○○子はー　今　どうしてるのー↑

03 I　同じー　その　老人ホッ　老人ホームではな　^　その老人ホームはやめてー　で
04 J　　やめたんちゅうの↑　うーん↓

05 I　別のー　うん↓　別の　それは　老人ホームとは違うのかなんか　知らないけどー　そう
06 J　最初　行ってたとこ↑　うーん↓

07 I　いうところで　そのお年寄りのー↑　なんか　なんかの手続きの　の代わりを　やったりとかー
08 J　　うん↓

09 I　そういう仕事↑　だから　実際にー　そ　介護するんじゃなくってー　事務的な処理　^　をする
10 J　うん↓　うん↓　ふーーーーーーーーーーん　^　あーー

上の(例12)では，「そのお年寄りのー↑」「そういう仕事↑」という注目要求に対して，聞き手である話者Jがそれぞれ，08行目の「うん　」と10行目の2番目の「うん↓」という発話によって自分の注目を表している．

上に挙げた5つの「注目要求」以外にも，次の(例13)にみられる「～さ」「～よ」「～ね」「～よね」のような表現によって，聞き手に注目を求めるものもある．

(例13)　資料5より

01 K　　うーん↓　うーん↓
02 L　名前でもさー　ち　なんかー　ねー↓　読み方が全然違う子　いるからさー　今日も　大ぼけ

03 K　　うーん↓
04 L　で　「トミロウ」　って書いてあるんだよね↑　名前　でも　「トミオ」　って読むのよ　それを

05 K　うん↓　うん↓　へー
06 L　大きな声で　「トミロウーー」　とか言ったら　(笑う)　で　みんながそれを笑うんだって

07 K　ーーーー
08 L　「先生，トミオだよ」とか言って　^　ん　まあ　いいやー　って思って　カッコーいい名前の子

このように，情報伝達行動の「持続」にあたって，「注目要求」も技術の1種として使われる．「ほら」「あのね」「語尾の延長」「同一語句の反復」「上昇音調」などによって表される．但し，会話参加者の親疎関係・上下関係などを考慮し，これらの表現を使い分ける必要があると思われる．

3–3. 時間稼ぎ(技術 3)

定延(1993: 70)が述べているように,「話し手は,自分がこれから発話する形式の最後部までを,常に明確に把握して話し始めるわけではない.寧ろ,話しながら様々なことを考え,考えながら話していく」.そのため,情報伝達行動の途中で,伝達上の問題(伝達内容または伝達方法に関する問題)が現れることがある.このような問題を処理するために,「考える時間」が必要になってくる.ここでは,「時間稼ぎ」という技術が現れる.

次の(例 14)における「んーーー→」「えー→」「あのー」がその「時間稼ぎ」の現れである.話し手はこのような言語表現の使用によって,「私は,今,伝達上の問題を処理している」「私の話は,まだ終わっていない」ということを他の会話参加者(聞き手)に分かってもらうことができる.その結果,他の会話参加者(聞き手)は今の話し手に,問題を処理するために必要な「考える時間」を与えるため,話し手は自分の未完了の情報伝達行動を続けていくことができるわけである.また,このような話し手の「時間稼ぎ」の裏にある問題処理行動を察知して,聞き手である会話参加者が何らかの助け船を出すこともある.

(例 14) 資料 3 より

01G　　うん↓
02H　日常の物は　^　荻窪の辺り　^　荻窪の辺りで済ませてー　デパートは　^ ^　んーーー→　何か

03G　　うーん↓　うーん↓
04H　捜すからー　あーん　たくさん　物を一応見たいなー↑　品物を見比べたいなー↑　っていう時は

05G　　うーん↓　うんうん
06H　^　新宿の伊勢丹ー↑　(笑う)　新宿が近いから　^　でー　(咳)　もう　買う物が決ま

07G　　(笑う)
08H　っててー　^　えー→　でも　一応　デパートで　あのー　義理を果たさなくちゃいけない　ってい

09G　　ふーん　そうか
10H　うようなケースの時はー　吉祥寺の伊勢丹　(笑う)　うーん↓　^ ^　そんなに人も

また,次の(例 15)における「そうね↑」,(例 16)における「そうだねー↑」は肯定表示というより,「時間稼ぎ」のために使われるものだと考えた方がいいだろう.「次に何を伝えたらいいかについて考えている」,という印である.

(例 15) 資料 1 より

01A　　うん↓　ちょっとねー↓　インフォーマントにさー　ちょっと　機械がうっ　動き
02C　困っちゃうねー↑　うーーん　う

03 A ませんので　また　来週　お願いしますって　言えないじゃない↑　いっ　M 1 の人なんかだったら
04 C んうんうん　うん↓

05 A ー　まだいいけどー　そんな　初対面の人とかだったら　ちょっとねー↓　だからー　そう
06 C うんうん　そうだ　ねー↓　うーん↓

07 A ね↑　今　だから　M 1 の人　色々　お願いしてるけどー　はっきり言って　機械操作の　なんか
08 C うん↓

(例 16)　資料 1 より

01 A なんーか　これで　もう　あたしは　消耗しきってるよ　この 2 週間　1 週間かー　2 週間ぐらい
02 C そうだね↑　あーーー　被験者の人捜し

03 A　そうそうそうそうそう　だからー　理想ー　り　多けれ
04 C で↑　うん↓　でも　最終的には　何組　要るの↑　何だっけ

05 A ば多いほどいいけどー　まーあ　○○先生　なんか　4 組でいい　とかって　言っててー　うん↓
06 C うん↓　うん↓　日本 4 組

07 A　だから　8 人 8 人　だけど　^　んー→　そうだねー↑　うーん↓　でも　それも　見
08 C 向こう 4 組　うん↓　うーん↓

09 A つかるかどうか　ちょっと　クエスチョン　ってところがあるからー　結構　暗いんですよね　あた
10 C うーーーん↓

次の (例 17) の 06 行目における話者 H の発話—「なんていうんだったっけ」は問題処理行動の現れである．問題を処理するために必要な「考える時間」をこの「なんていうんだったっけ」という発話で生み出している．ここでは，聞き手である話者 G が問題処理中の話し手 (話者 H) を助けるために，05 行目の「いしかわちょう」「元町」という助け船を出している．また，09 行目における話者 G の発話—「なんていうんでしょうね↓」も問題処理行動の現れである．この発話によって，問題を処理するために必要な時間を稼いでいる．

(例 17)　資料 3 より

01 G　うん↓
02 H ^ ^　今年のお正月に　^　中華鍋とか　いろんなものを　買い出しに　行きながら　^ ^ ^

03 G
04 H 中華も食べてー　って　^ ^　その時に　^　あれ　ほら　あの　すごく　有名な店が並んでる通り

05 G　^　いしかわちょう　元町　うー
06 H って　なんていうんだったっけ　いしかわちょう　そうそうそうそうそう　元町　そう

07 G ん↓　うーん↓　^ ^　まあ　歩いて　歩けない距離じゃないけど
08 H そうそう　^ ^　で　そこを通って

09G ちょっとん ^ その なんていうんでしょうね↓ ^ 中心と中心↑ の間があるんですよね
10H うん↓ うーーーーーーーーーー

11G ー↓ 横に だから 中華街と ^ 元町も ちょっと 離れているしー うーん↓ で
12H ーーーーん うん↓ そうねー↑ うーん↓

13G ひと駅 乗るのも馬鹿らしいしー
14H だから 結局 どこ どこで降りたんだっけなー↓ いしかわちょ

「時間稼ぎ」として使われる言語表現には以下のようなものがある．そのうちの一つだけを使うこともできるし，それらを組み合わせて使うこともできる．

あのー /
まあ /
んー / んーと / んーとね /
えー / えーと / えーとね /
そうね / そうだね / そうですね /
なに / なんだ / なんだろう /
なんていうの / なんというの / なんていうか / なんというか /
なんていうのかなー / なんというのかなー /
なんだったっけ / なんていうんだったっけ /
なんていうんでしょうね

なお，上に挙げた言語表現を使わずに，単に語尾を延ばすことによっても，この「時間稼ぎ」の効果が得られる．

3–4. 他者無視(技術 4)

情報伝達行動の途中で，他の会話参加者の発話が入ってくることがある．この場合，その発話を無視して話し続ければ，自分の情報伝達行動を最後まで成し遂げることができる．例えば，次の(例 18)では，話者 F が一度なくしたが戻ってきたコピーカードのことについて述べている．その途中で，05 行目の話者 B の「使われてたでしょう↓」という情報要求が入っている．但し，話者 F はこの話者 B の情報要求に対しての応答をすぐに出していない．言い換えれば，ここでは，話者 F はこの話者 B の情報要求である発話を無視して，自分の情報伝達行動を続けていることが観察される．

(例 18) 資料 2 より

01 B 名前 書いてあったの↑ わたし×××
02 F (笑う) 届け出て いや んーん↓↑ それは 後で書いたの↓ (笑う) もらってから

03 B ×× うーん↓ そうよねー↑
04 F うーん↓ 書いといた方がいいよー なくした時に ねー↓ あのー 戻ってくるか

05 B ^ ^ あのさー わたし うーん↓ 使われてたでしょう↓
06 F ら そしたら 使え うーん↓ 前は使えたー 前は使えたコピー機

07 B うん↓ ^ ^ えー↑
08 F にー これ このカード 入れても 使えないからー どう どうしたらと思って 分

09 B 本当↑ でも まだ 途中でしょう↓
10 F かんない うん↓ そう↓ また こういう うん↓ でしょう↓ だから なんでだろう

以上のように，情報伝達行動の「持続」にあたって，「接続表示」「注目要求」「時間稼ぎ」「他者無視」の4種類が技術として観察された．この4種類の技術は，「話の展開に関する主導権」を持ち続けるための技術とも考えられる．「話の展開に関する主導権」を失いそうな場合に特に必要とされるものである．このような技術を使うことによって，話し手は，他の会話参加者の言語行動または非言語行動による中断を防ぎ，自分の言いたいことを最後まで言い続けることができるのだと考えられる．

4. まとめ

本稿では，「情報伝達行動の持続」に焦点を当て，情報伝達行動の中断を防ぐために使われる技術(「話の展開に関する主導権」を持ち続けるための技術)を「接続表示」「注目要求」「時間稼ぎ」「他者無視」の4種類に分けて述べた．

自分の言いたいことを最後まで順調に言い続けるのは簡単なことではない．特に，日常会話のような場面では，他の会話参加者の行動により，自分の情報伝達行動が始められなかったり，途中で中断したりすることがある．したがって，「話の展開に関する主導権」を独占し，他の会話参加者の行動による中断を防ぎ，自分の情報伝達行動を成し遂げるためには，確かに何らかの技術が必要である．日本語母語話者はその技術を自然に身につけるのが普通であるが，日本語学習者にとっては重要な学習項目の一つではないかと思われる．谷口(1989)，畠(1988)は，「会話技術」，「会話ストラテジー」が会話教育において扱われるべき項目だと主張し，また，その項目のリストを提示している．このような項目を教育の現場に導入するためには，まず，本稿のような基礎研究の存在が必要であろう．

情報伝達行動の「持続」にあたってみられる技術が会話において果たす役割の重要性を認識するならば，それらを学習項目として日本語教育の現場に導入する必要性も認識しなければならないであろう．

参 考 文 献

伊豆原英子・嶽　逸子 (1992)「中・上級学習者の話し言葉(独話)の分析と考察——情報伝達を通して」,『日本語教育』77 号, pp. 103–115.

岡崎敏雄 (1987)「談話の指導——初～中級を中心に」,『日本語教育』62 号, pp. 165–178.

尾崎明人 (1981)「外国人の日本語の実態 (2)　上級日本語学習者の伝達能力について」,『日本語教育』45 号, pp. 41–52.

定延利之 (1993)「談話構造とフィラー」,『言語理論と日本語教育の相互活性化』(日本語シンポジウム予稿集), pp. 70–84.

谷口すみ子 (1989)「会話教育のシラバス作りに向けて——会話の技術のリスト試案」,『日本語教育』68 号, pp. 259–266.

畠　弘巳 (1988)「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」,『日本語学』第 7 巻第 3 号, 明治書院, pp. 100–117.

メイナード, 泉子. K. (1993)『会話分析』, くろしお出版.

李 麗 燕 (1995)「日本語母語話者の会話管理に関する一考察——日本語教育の観点から」,『日本語教育』87 号, pp. 12–24.

———— (1997)「日本語母語話者の雑談における「情報伝達行動の再開」」,『日本語教育』92 号, pp. 48–59.

Dörnyei, Z. and S. Thurrell. 1992. *Conversation and dialogues in action.* New York: Prentice Hall International.

Edelsky, C. 1981. Who's got the floor? *Language in Society*, vol. 10, 383–421.

Hatch, E. 1992. *Discourse and language education.* Cambridge: Cambridge University Press.

Jefferson, G. 1978. Sequential aspects of storytelling in conversation. In *Studies in the organization of conversational interaction*, ed. Jim Schenkein. New York: Academic Press.

Maynard, S. K. 1989. *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management.* Norweed: Ablex Publishing Corporation.

Polanyi, L. 1985. Conversational storytelling. In *Handbook of discourse analysis*, vol. 3 Discourse and Dialogue, ed. Teun A. van Dijk. London: Academic Press.

Sacks, H. 1972. On the analyzability of stories by children. In *Directions in sociolinguistics*, ed. John J. Gumperz and Dell Hymes. New York: Holt, Rinehard and Winston, Inc.

Sacks, H., E. A. Schegloff, and G. Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, vol. 50, no. 4, 696–735.